
白い翼

蜜柚 海砂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い翼

【Nコード】

N7242H

【作者名】

蜜柚 海砂

【あらすじ】

幼いころ、主人公の亜海の幼なじみが塾の帰りに誘拐され、殺された。亜海は幼なじみが行きたかった高校を目指し、学校ではいつも一人。従兄の事件が問題となり、友達もいない。知り合い関係より誰一人として上にいかない心をもった亜海に一人の男が現れる。亜海の折れた羽根を取り戻す事はできるのか――…

プロローグ

忘れていた記憶…

忘れていた夢…

忘れていた場所…

そして、

かけがえのない人…

失いかけていた羽根…

現実…

あなたは私の天使ででした。

何も感じなかった風景、キラキラしてる。

羽根が無い鳥には楽しむことはできなかった。
無くなった羽根を取り戻すことはできない

そう…思っていた。

今なら言えるかな？

「ありがとう」と「大好き」

沢山、伝えたいんだ。

天国にいるあなたに。

楓磨——…
ふうま

プロローグ（後書き）

私、蜜夢は初めて、小説を書きます。
まだまだ未熟なので、応援してください！。

第一章：戻らぬ事実

♪ 幼なじみ ♪

「亜海く？」

ん？誰？

「なあゝに？」

私？これは夢？

「あそぼーよー」

「いいよ！。涙翔^{るいと}何か持ってきた？！」

涙翔…。やっぱり夢。

懐かしいな。

「何にも！。ねえねえ。亜海はさあ、高校何処行く？？」

「まだそんなの決めてないよー。涙翔は決めてるのー？」

高校かあ…もう私も2年生だ。

「うん！決めてる！」

「そつかあ。まあ、涙翔はお兄ちゃんがいるしね！何処行くの？」

“莉都川^{らいとがわ}高等学校”

涙翔、行きたがってたよね。でも、理由聞いても絶対に答えてくれなかった。

どうしてなんだろう、ってずっと思ってた。

「へえゝ！じゃあ私もそこにしようかな！」

「えゝ！？嫌だよ！絶対に来ないで！！」

「なんでゝ？？」

「なんでも！！」

——っ！？

「起きなさいったら！！！！」

「うわゝゝゝ！！！！」

ドサッ！

私、橘 亜海。今日から中学2年生になるんだけど、朝から変な夢

見て遅刻。

しかも布団から落っこちた。

「いつてきまゝす!!」

朝ご飯の食パンを加え、全力疾走。

中学生になってからの初めての遅刻だった。

学校に着くと、皆は遅刻した私を見ようとしもない。

当然だ。1年生の時のあの事件が起きてから、誰も私と顔を合わせようとしない。

小学生の頃の友達も皆、私を裏切ったんだ。

さつき夢で見た幼なじみの涙翔が行きたがっていた高校。

絶対に私が行ってみせる。涙翔が死んでから、私はもう勉強した。

中学1年の後期の成績は上から3番目!。

先生に「この調子ならその高校に行ける」と言われたが、本当に行けるのだろうか。

そんな不安を持ちながら始業式が終わった。

「ねえ、この問題教えてくれる?」

数日後、私は隣の席の子に話しかけてみた。
だけど、

「えっ…。解らないよ!!」

問題はわかるハズもない。中学3年の数学だし。

でも、返事をしてくれただけでも、少し、嬉しかったんだ。

担任は新しい人。

先生は従兄の事件を知っているだろうか。

そんな事を聞く勇氣もなく、今日の授業は終わった。

「あの…」

帰り道、信号を待っている時、後ろから声をかけられた。

私? そんなわけないよね。こんな私に声を掛ける馬鹿、世界中探してもいないよ。

でも、この出会いで私の未来は大きく変わっていったんだ。

「私…ですか？」

後の人に聞いてみた。

「あっ！はい。えつとお…川島涙翔の幼なじみさんですよね？？」

川島…涙翔…

なんでその名前を？

一応、

「ハイ。そうですけど」

と棒読みで答えた。

「やっぱり！。俺、園良楓磨^{そのふうま}って言うんだ！涙翔の親友…って言うか何て言うか…」

「私、橘亜海です。何か私に用ですか？」

単刀直入ですいません。と心の中で謝った。

「用…ではないんですけど、どんな人なのかな〜と思って！。中学涙翔と学校違うでしょ！？亜海ちゃん。俺、涙翔から中学に入って、亜海ちゃんの事色々聞いてたんだ！で、どんなのかな〜みたいな！」
そつだよ。涙翔とは中学違うんだよ…。涙翔は受験したからね。頭の良い中学いったんだよ。

でも、去年のちょうど今頃、塾の帰りに――。

思い出すと、涙がこぼれてくるから…ずっと思いたさないようにしていたのに…。

「ウッ…ウッ…グスッ…」

♪ 優しい手 ♪

「?！どうかした?! ってか、俺なんか変な事言ったり変な事した??!」

やばい…。もう、二度と泣かないって…高校受かるまで、涙見せないって…決意したのに!!

「ウツ…ウツ…グスツ…ウウツ…」

「泣くなって! とりあえず、ほらっ!」
えっ?

楓磨は、腰を降ろして、私をおんぶしてくれる格好をしていた。
「乗れって!」

信じていいの? 裏切らない?

ゆう…かい…?

ころ…される…。

この人に…殺される!!

「いやあ~~~~!!!!」

大きく叫んだ。回りの視線を気にせず、ただただ、私は叫んだ。涙翔のようになりたくない。その気持ちが楓磨を信じれなく、抑え込んだ。

でも楓磨は、私にそつと手を述べてくれた。

「大丈夫だから。涙翔のようにには絶対に俺がさせないから。涙翔にお願いされたんだよ。本当は」

えっ?? お願いされた?

楓磨が発した言葉に私は大きく反応した。

「涙翔が、塾が終わってから、メールしてたんだよ。俺達」
それからの話はこうだった。

涙翔は塾が終わったら携帯で楓磨とメールをしていた。

涙翔が襲われた時、楓磨に電話をしたらしく、お願いされた。

「幼なじみの、橘亜海って奴っ…守ってくれよ。」

と。涙翔は死ぬって解ってたの？

だから楓磨にそんなお願いしたの??

そんな疑問が出てきた。

「だから。だから。俺は、亜海を、守らなくちゃいけないんだ。涙を拭いて?絶対に守ってみせるから。はい」

そう言っで、楓磨は座り込んでいる私に大きな手を出してくれた。

ハンカチと一緒に。

黙ってハンカチを取り、手をつかんで立った。

ありがとう」もいわずに。

そんな私を置いて、手を握ったまま、私を近くのお花畑に連れて行ってくれた。

手を離し、

「ここなら落ち着くだろ」

と言ってくれた。

そこは、見たことのない場所だった。

「ここ、涙翔にも教えてやったんだ。そしたらあいつ、ここにはまっでさ、毎日ここに来ようって言うんだよ。」

少し笑いながら、そんな思い出話を語っていた。

そんな話を聞いていたら、涙もおさまって、笑顔が出来てきた。

私も少し笑うと、

「笑った!??やっぱり笑えるよな。なんか、涙翔と亜海って、どっか似てるよな」

「えっ??どこが?」

私も話せるようになり、段々盛り上がってきた。そんな時だった。こんな話題がでてきたのは。

「どこだろ??なんか笑い方が似てるのかな?」

「笑い方?涙翔ってこんな笑い方だったっけ??もっと明るかった

じゃん!!」

「えっ!? 嘘嘘!! 全然だよ!! 学校ではクールだし、俺と喋るときも笑うときも、なんかどっか暗くて…」

「なんで? 私といるとき、普通に明るかったじゃん。あれは嘘の明るさだったの??」

「じゃあ… 多分、学校では寂しかったのかな? 亜海がいなくて。さっきの亜海の笑い方もそうだったもん。涙翔がいなくて、寂しくてどこか暗かった。お互い、もっと話した方が良かったのかもな!!」
楓磨は何でもお見通しだったよね。私の思ってること。私が考えること。

だから好きになったのかな。

全部分かってくれそうで、同情じゃないけど優しい。
多分、そうなんだ。

「優しいね」

ふとそんな言葉が思いついた。

そして、口が勝手に動いてしまった。

楓磨はそれをスルーして、あぐらをかいた。

その優しさに。

その温もりに。

その綺麗なお花畑に。

園良楓磨という存在に、

囲まれて、私は

バサッ

「気持ち―」

涙翔の不安なんか飛んで、その安心さに、寝転がった。
生まれて初めてだった。

こんな綺麗なお花に囲まれて、寝転がるの。

そして、

「お前も、ここが気に入ったか?」

と楓磨が一緒になって寝転がりながら言った。

気に入った。

「涙翔がな。ここに初めて来た時にこんなこと言ってたの」

私の返事も聞かず、楓磨は喋りだした。

「“こんな綺麗なお花畑で寝転がるの、生まれて初めてだ”って。

その言葉をあいつが言ったとき、俺見たんだ。あいつがすごく嬉しそうに顔をしてたの」

私と同じだ。

なんだか、楓磨の言っている事が現実になってるみたい。

クスクスツと鼻で笑った。

「何笑ってたんだよ。…きつと、涙翔は亜海と来たかったんだろうな

…」

楓磨の眼に涙が…

泣いてるの？

「大丈夫？？」

降ろしている顔を覗き込みながら聞いた。

「大丈夫だから。ごめんな。俺が泣いちゃあどうしようもないよな」

その優しい手で私を引き、抱きしめた。

私も、抱き返した。

「強がらなくていいんだよ」

と、優しく呟いた。

♪ 最悪な出来事 ♪

楓磨と出会ってもう2ヶ月。

私は今、昨日帰ってきた小テストを見ている。

「ん……」

どうみてもたいして上がっていない。

1カ月前にも小テストをやったのに、

前は88点で今は92点……

「ああ……!!」

もうヤダ。

たったの4点しか上がってない!しかも得意の算数なのに……

亜海は頭を抱え込みながら小さい雫を瞳から流した。

ずっと95点取ってたのに。ずっと上をキープしてきたのに……

このままじゃ涙翔の高校行けないよ……

大きな粒をどんどん流す。

「涙翔お……やっぱり亜海じゃ莉都川高校行けないのかな」

そう、机にある涙翔の写真を見つめて問いかけた。

答えが来ることは無いと分かっていたのに。

その時、

「ピーンポーン」

と音がした。

なんだろう……って!

でなきゃ!家には誰もいないし。

大事なことだったらずいっ!!

急いで玄関へ向かった。

「はぁ~~~~い!!!」

ガチャッ。

「…」

黙るはずがある。

だって、

「誰もいないし…」

って感じなんだもん。

玄関を開けた瞬間、たしかに影があつたのに。

靴をはいて外を見てみる。

でもやっぱりいなかった。

「何だつたんだろ……っ!？」

突然、口を抑えられた。

「誰っ?」「何?」といったかつたが、ふさがって喋れない。

「静かに!すぐそこまでだから!」

この声…

中学1年生の時、亜海をいじめてた子だ。

知っている人だと分かった亜海は足で蹴った。

「痛っ!!何するの!？」

女が言った。

それと同時に抑えられていた腕が離れ、喋れるようになった。

「何すんのはこっちの台詞《せりふ》だっつーの!」

バツと後に向き、言った。

すると

「だって…ちよつとやらないといけないことがあつたから…亜海じやなきや出来なかったから…でも頼んだってどうせやってくれないだろうし!!それに…」

そこで言葉を詰ませた。

「それに?」

「それに…グルの男子の中に好きな人がいるから…従わないと…」
グルの男子?

その言葉だけが、亜海は不信に感じた。

「グルの男子って何？」

聞いて答える奴じゃないと知っている。でもここまできて言わないって、どんだけの奴なんだよ、と少しでも思ったから、聞いてみた。

「…ちよつとね」

その時、私は思った。

「じゃあ、亜海の事知ってる??」

私のことを理解してくれる。そう。

この子なら、私の…亜海の辛さや虚しさも、分かってくれる。確信したんだ。

「ごめん。知らないや。ねえ、本当、ちよつとだけ来てくれる??
お願い」

目をつぶり、手を合わせて真剣に、お願いをしてきた。

答えは

「いいよ。ちよつとだけなら」

OKだった。

だが、その場所に着いてから1分後、後悔した。
来るんじゃないかったと。

だってそこは、

「早く来いよ!!」

男の声。

「死にてーのか!？」

そんな雑な言葉。

「アンタ達、警察に通報するよ??」

そんな言葉しか出ないほど、恐怖心に覆われた。

当然、男たちはますます怒り、

「何言ってんだオラァ!!」と言いながら、こっちに向かってきた。

私のあの確信は、嘘だったのかもしれない。

自分に友だちが欲しかったから。

楓磨と涙翔のような関係の子が欲しかったから。

独りに耐えきれなくなったから。

そんな理由でただ単に、自分に言い聞かせてたのかもしれない。

私は、今ここでずっと独りになるんだ。

ただ殴られて。誰も助けに來ない。

楓磨というより、こっちの方がずっと私には似合ってるのかもしれない。

殴られて、倒れこんだ状態で、こんな事をずっと思っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7242h/>

白い翼

2010年12月15日14時34分発行